

岡山 史料ネット Newsletter Vol. 8 2022. 9

学術野営 2022 in 吹屋のフィールドワーク

活動報告 (2022 年 3 月～2022 年 8 月)

1. 資料修復活動

事務局のある岡山大学活動制限指針も踏まえながら、2022 年 3 月・5 月は岡山大学内を対象に、6 月は会員・サポーター向けの掲示板を介したボランティア募集を行い、小規模ながらドライクリーニング・洗浄作業を実施することができました。

2. 令和 3 年度県文化財等救済ネットワーク会議に出席

県文化財課が主管し岡山史料ネットが構成団体となっている会議が 3 月 17 日 (木) にオンライン形式で開催され、活動実績・計画について質疑応答を行いました。県では、文化財等のレスキューにおいてより円滑な対応ができるよう市町村・関連団体等を対象としたマニュアルの策定が検討されていることが報告され、今後具体化が目指されることになりました。

3. 岡山市災害ボランティアネットワーク「災害ボランティア展」

7 月 28 日 (木)・29 日 (金) に岡山市災害ボ

ランティアネットワークが主催し、加盟の各団体が展示・ワークショップなどを行う「災害ボランティア展」が岡山市役所本庁舎で開催されました。岡山史料ネットでは 2021 年度の活動内容を紹介するパネル展示を行いました。

4. 総会・活動報告会



8 月 6 日 (土) にきらめきプラザを拠点に総会・活動報告会「学生と考える西日本豪雨一地域の記憶と記録を伝えるために」をハイブリッド形式で開催しました。総会では、2021 年度の活動報告案・決算案が承認され、2022 年度の活動方針案予算案・役員案がそれぞれ承認されました。活動報告会での報告・コメントなどは本紙に掲載しておりますので、どうぞご覧ください。27 名が参加しました。

(文責・松岡弘之)

「社会調査実習」 報告書が目指したもの

福田 雄（ノートルダム清心女子大学）

社会調査実習とは、社会調査にかんする基礎的な知識・技能・応用力や調査倫理を身につけることを目的とした実習科目である。履修者は、調査の設計・実施・報告書の執筆までを行うことで、社会調査士資格に求められる情報収集力・分析力・行動力を実践的に学ぶ。昨年の実習では、「西日本豪雨災害と社会」というテーマが設定された。履修生 19 名が「防災と避難行動」「災害と記憶」「災害とボランティア」「災害とジェンダー」「災害と自治体」という五つのグループに分かれ、被災から三年が経過した時点における様々な取り組みや課題を調査し報告書にまとめた。

インタビューをもとに書き起こされた原稿を読むと、それぞれの語り手が震災前から行ってきた取り組みや、その取り組みの背景にある問題意識、多様な関心が生き生きと浮かび上がってくることがある。たとえば、復興イベントで行われる花火の打ち上げという一つの取り組みであっても、それを復興の象徴として歓迎する人もいる一方で、他方ではその爆発音によって災害時の恐怖を思い出す人もいる（西日本豪雨災害ではアルミ工場の爆発があった）。「自治体職員」「ボランティア団体」もまたけっして一様に記述することはできない複雑さを有しているし、地域社会でも、世代ごと、性別ごとに防災意識の違いが見て取れることもある。さらにこの多様な意識も、時間と共に変わっていくことがある。このように、フィールドワークの醍醐味は、地域社会の多様性や動態性が記述される点

にある。

報告書をまとめるにあたって、注意した点は以下の二点である。第一は、ある情報を得るにあたって、いつ誰がどのようにして調査協力者（ないし資料のありか）にアクセスし、またその語り（ないし情報）がどのような文脈のなかで収集されたのかを、できるだけ明確に記述するということである。第二は、報告書のうち、どこからどこまでがインタビューで語られたこと（ないし資料から得られた情報）であり、どこからどこまでが調査者の解釈かを弁別することである。記録を残すにあたって初歩的ともいえるこの方針は、この報告者の内容が後々批判的に検討することができるよう設定された。

とはいえ、限られた時間のなかで、こうした方針がどこまで徹底できたかについては心許ない。そもそも新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、必ずしも十分な調査をすることができなかったという事情もある。調査にご協力いただいた皆様にはあらためてお礼を申し上げたい。ぜひ報告書を手に取って感想や批判をいただければ幸いです。

□事務局より□

実習報告書については、ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科（電話 086-252-2187 メール gennsha@post.ndsu.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

《コメント》

岡山史料ネット活動報告会参加記

藤本瑠奈

（ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科）

2022 年 8 月 6 日に開催された「岡山史料ネット活動報告会」に参加しました。今回のテーマが「学生と考える西日本豪雨と地域社会」ということで、私は

昨年度行った自主防災組織へのフィールドワークについて面白さや難しさに焦点を当てて発表しました。フィールドワークの面白い点は自分の足を使って新たな知見を得られたこと、フィールドワークでの出会いから今まで自分の中になかった考え方や感じ方を知れたことなどがありました。反対に難しい点は調査の許可取りやインタビュー技法、事前準備など、調査のや

り方について一通り習ってはいるものの、初めてのフィールドワークでなかなか思うようにいかなかった点がありました。

また質疑応答の時間では調査する人・される人という関係性について考えさせられました。特に地域社会へ足を踏み入れるということは生活空間に踏み入るということで、当然調査される側はそれだけ負担を負うことになります。だからこそ調査する側は誠意や慎重さが求められ、それは調査計画や事前準備に現れると感じました。また調査される側である川田さんが調査や取材についてどのように考えていらっしゃるのかお聞きできたことも印象深かったです。

* * *

岡山資料ネット 2022 年度活動報告会に参加して

川田一馬（総社市下原自主防災組織副本部長）

西日本豪雨被災後、色んな会合に出席させていただきましたが、8月6日開催の貴報告会のような類いの会は初めてのことでした。

皆さま方の取組みの一端に触れる機会をいただき、誠にありがとうございました。

記録・記憶とは、あるいはそれらの資料保全とは何なのか、そして誰のために何のために未来へ残そうとしているのか。

現在私たちが取組んでいる記憶誌や被災資料の保存・活用方法など悪戦苦闘中のお話をさせていただき、あわせて皆さま方のご活動の一端も伺うことができました。

以下、ノートルダム清心女子大生さんのフィールドワークでの顔を思い浮かべながら、今回の会長・二階堂先生・スタッフの先生方のお話をお聞きしたうえで、所感を3つに纏めさせていただきました。

1) 生きる（幸せに）ということ、人間にしかできない、人間だからできること。そのような観点から、記録・記憶、資料保全の対象スパンは、文学～有事まで全ジャンルとなること。（私たちの報告は、有事か

ら生き延びる取組みの事例でした）

2) 対象となる史実（真実）のなかには文字や写真では表わせないものがあり、これらを伝承する別の手段・方法を何か考える必要があること。

3) 平時から防災（逃げ遅れない）の備えのために、有益で適正な情報の発信ソースが存在していること。（発災時の自助・共助・公助の狭間を救う一つに貴災害資料ネットの活動がまだまだ生かされると思った）

最後に、現在頭から離れないフレーズを紹介させていただき、参加のお礼に替えさせていただきます。ありがとうございました。

“無関心が犠牲者を生む” “若者・子ども真ん中時代の到来”

* * *

「学生と考える西日本豪雨」によせて

松岡弘之（岡山史料ネット）

今年度の活動報告会は大学の社会調査士の資格に関わる授業で西日本豪雨について学び考えるという福田さんの実践についてお伺いしようと企画しました。授業に学生として参加した藤本さん、自主防災組織のお立場から調査に協力された川田さんからあわせてお話しを伺うことで、私自身災害を経験したコミュニティのありようや、歴史を切り口として地域に分け入ることの意味など色々なことを考えさせられました。岡山史料ネットでは、修復された記録が地域のなかで活かされ未来に伝えられていくための活動に取り組んでおり、コメントでは私自身も文書館機能の意義や役割について紹介する一般教養科目を開講して、資料レスキューについても取り上げていることを紹介しました。まだまだ活動の認知自体は低いものの、大規模災害の増加を受け関心を持ってもらえていると思います。これらも含めて、いろいろな形で被災経験やその土地をめぐる経験が共有され、活動のすその広がることにつながれば良いと考えています。



7月1日から3日に、旧吹屋小学校（高梁市）で国立歴史民俗博物館等が主催する「学術野営」という催しが開催されました。地域のさまざまな資料の保存・継承・利活用に関わる専門家が交流・議論するものです。高野かずみさん（岡山大学大学院博士課程）に参加記を寄稿いただきました。

学術野営 2022 in 吹屋の参加録

高野かずみ

7月初めの三日間、我々は岡山県高梁市へ向かった。題名に付されている「学術野営 2022 in 吹屋」への参加が主たる目的であったが、その文化財の豊富さには目を見張るものがあつた。

野営の前日である7月1日、まず訪れたのが備中松山城である。ここは雲海に浮かぶ堅牢な「天空の山城」として注目を集めており、近年では西日本豪雨後に住み着いた“猫城主”こと「さんじゅーろー」がマスコットキャラクターとして人気を博しているという。意気揚々と山中を進む一行は次第に例を見ぬ暑さと険しい山道に行く手を阻まれ、「難攻不落の城」の歴史の重みを（身を以て）痛感したのである。途中木陰の涼しさに身をゆだねつつ、終にその重厚な石垣のもとへ辿り着いたかと思うと、そこには悠々と涼をとる城主がおわすのであつた。その御屋形様に導かれるまま備中松山城の中へ入れば、長大な時間の流れを小ぶりの城壁に留めた空間が広がっている。

さて学術野営の当日である2日目、気鋭の参加者らによって猛暑に負けぬほど白熱した議論が繰り広げられていた。文化財とその保全活用に対しどうあるべきかを問う本イベントでは、文化財にまつわる「こんな職業があつたらいいな」というアイデア企画が開催され、当日の発表会の内容と合わせて意見交換が行われた。文化財保全に向けた産官民連携の重要性、そこから新たに創出される文化財の価値とその活用方法など、分野を限定しない参加者らによる多視的な発想が次々と浮かんでくる。そうした中で度々指摘されたのが「人文学の在りよう」である。昨今はしばしば世間で「文学部廃止論」が話題を呼ぶが、一見するとなにも“生産的”なことをしていないように思われる人文学の領域が——例えば文化財のように——何らかの物質的対象を通じて社会に叡智を還元する手法を考えねばならぬ転換期に立たされている。この状況を鑑みれば、学術野営で示された様々な発想は人文学にひとつの提案をもたらしてくれるのではないだろうか。

イベントが終了した最終日、私は吹屋の町を散策していた。野営の会場となつた旧吹屋小学校、旧片山家住宅の並ぶ大通り、『八つ墓村』好きにはたまらない広兼邸——どれも趣深く、旧事の残り香を漂わせている。土産屋でベンガラ染のネックチーフと地酒・地ビールを購入し、実家の両親にこの三日間の思い出を伝えようと密かに心づもりしながら帰路に就いたのであつた。

歴史資料保全活動への支援募金のお願い

被災状況の調査や、被災資料のレスキュー、クリーニング作業など、活動継続のための資金が必要です。募金にご協力いただける方は、下記口座にお振り込みいただければありがたく存じます。

ゆうちょ銀行総合口座（普通口座）

【記号】15470 【番号】38569531 岡山史料ネット（オカヤマシリョウネット）

（他の金融機関からの振込の場合）

【店名】五四八 【店番】548 【預金種目】普通預金 【口座番号】38569531

2022年3月から8月までにご寄付をいただいたみなさまは以下のとおりです。記して厚く御礼申し上げます。

山崎克枝（敬称略）

事務局 〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1 岡山大学文学部日本史研究室内

電話 086-251-7442

e-mail okayamasiryonet@gmail.com

URL <http://okayamasiryonet.s1008.xrea.com/>

Twitter @okayamasiryonet